

◎再洗礼派の伝統にある弱点や欠点をさらけ出すことによって、至らない点は改め、修正や新しい視点を持つことに前向きとなる。

アナバプティズム—その隠し立てのない姿

◎再洗礼派には、人々に恐怖心を抱かせる側面があった。それがいかなる理由で生じたものであっても、目を背けるわけにはいかない。再洗礼派に対してどんな指摘があるのか。

* 律法主義——真剣に弟子道を探求する姿勢の中に潜む危険。批判者たち（・行いによる義だ…「恵みのみによる救い」のはずだ、・新種の修道士たちだ、等々）。抑圧された集団が陥りやすいのが、倫理が靈性に優先してしまう危険。

* 聖書テキストの取捨選択——イエスに傾聴するあまり、旧約聖書を軽んじているという指摘あり。また、イエスを中心にして聖書を読むと言いながら、イエスの癒しのみわざを軽視。

* 知性主義／反知性主義——かつては、反知性主義という批判を受けた（教育のあるなしに関係なく、聖霊の助けにより、すべてのキリスト者は聖書を理解できると確信）。迫害により、教育を受けた指導者がすぐに逮捕、処刑されたという現実があった。

今日では、逆に知的水準が高すぎるという批判（アナバプテストビジョンの回復が、メノナイトの学者主導であったため）。課題—歴史的伝統を現実社会に適用し、いかに実践するか。

* 不和——自由な聖書解釈が生み出した危険（聖書解釈の違いが不和や分裂の原因に）。和解や敵への愛を主張するグループなのに、繰り返したお家騒動。

* 分離主義——迫害や排斥により、社会との関わりを避ける分離主義的傾向が浸透。初期の再洗礼派が持っていた、経済改革や社会正義に対する積極的姿勢が失われた。

* 静寂主義——初期の再洗礼派は熱弁をふるい、信仰を分かち合うのに熱心だった。処刑場に連行される途中でも、証しし続けた。しかし、長期にわたる迫害のゆえに、沈黙こそが信仰を守る唯一の手段と考えるようになった。現代においては、キリスト教の知識を持たない人たちに、もっと声を大にして語る必要がある。無言の証しによっては、現代人は、クリスチャンの生き方の源に何があるのかがわからない。

* マンネリ——急進的な宣教運動も、次第に熱意が冷め、消極的態度へと変化。特に、同一文化による均質性や漫然とした体質が指摘される。

以上のような欠点は、どの程度のものか。その対策は講じられているのか。

再洗礼派の伝統に欠点はあるものの、アナバプテスト・ネットワークの会員のみならず、他の伝統の代表者たちから再洗礼派の伝統は、高く評価されている。

◎アナバプティズムへの支持

* ブライアン・マクラレン（エマージング・チャーチの協力者）

- ・キリスト教指導者が気づき始めたこと——多くの青年が教会を離れた理由（キリスト教が霊的な必要のみに目をとめて、身体的なことや社会的な必要を排除してきた）。青年を取り巻く現実、組織的不正、貧困、家庭や学校、地域社会など機能不全に陥っている問題に取り組まなかったキリスト教のあり方。福音は個人と社会、そして地球全体にとって福音なのである。それを実践していたのは再洗礼派だとマクラーレンは言う。
 - ・単に「教会に通う」のではなく「キリストの生き方を自らの生き方とする」
 - * トム・サイン（未来派、からし種協会のメンバー、共謀者たち）
 - ・神が新しい世代を通して新しいことをなさっている——再洗礼派の特徴を示す何か。
 - ・全生涯をかけた信仰を持つように、もっと外に目をむけた宣教に取り組む教会形成を訴える。
 - ・聖書的で急進的な生き方、信仰と平和の証し、正義と被造物のケアへの呼びかけ。
 - * グレゴリー・ボイド（福音派説教者、作家、「クリストゥス・ヴィクトルミニストリーズの代表者」）
 - ・神の国の似姿はイエスであり、キリスト教の心髄はただ「イエスに倣うこと」。それに気づいた人たちの覚醒。
 - ・他者の上に立つ権力を獲得して世に勝利するのではなく、他者の下に権威を行使することによって（すなわち自己犠牲の愛の力によって）勝利する。
 - ・集団的アイデンティティーと歴史に根ざしているという意識が欠如していることに気づき、それをアナバプティズムの伝統の中に見出した。
- このような背景には、制度化されたキリスト教が衰退している現状がある。
- * アラン・クライダーの表現
 - ・聖歌隊かオーケストラにたとえるなら、アナバプテストの声や楽器は、ある期間中沈黙を強いられたか、沈黙を余儀なくされた。しかし、機が熟した。再洗礼派の伝統も他のすべての伝統に属するクリスチャンに寄与できる。

霊性と弟子道

- * 再洗礼派の伝統における霊性とは「弟子道の霊性」のこと。本物の霊性と弟子道は切り離すことができない。
- * アウグスバーガーの定義する「三極性の霊性」
 - ・個人的変革の霊性（心の旅）、神との出会いの体験（神へと向かう旅）、隣人との誠実な関係と連帯（友人と宿敵、隣人と迫害者が一緒の共同人間性の旅）、これら3つが相互依存している。
- * ドイツ語の「ゲラーセンハイト」
 - ・再洗礼派にとって、これはキリストの主権に服従すること（聖書に従順、自己犠牲、寛大さ、神に信頼を置く祈り、共同体の訓戒の受諾、真実を語る、自己防衛の拒否等）

- ・洗礼と聖餐の理解における「ゲラーセンハイト」(p.210 参照)
- ・ゲラーセンハイトは「素顔の再洗礼派」の霊性そのもの。

今日のアナバプティズム

- * 著者たちの関心——私たちがもっと忠実にイエスに従う者となるために、再洗礼派の伝統がその一翼を担うこと。
- ・再洗礼派の伝統の中に聖書を読み解くためのレンズを発見した。それが全身全霊を傾ける弟子道へと私たちをいざない、私たちが従うべき、礼拝すべきお方はイエスであると道案内をしてくれる。